

活躍する明専会員に聞く⑥

学校法人関東学院理事長

前 関東学院大学学長

規矩 大義（開63）氏

現在 理工学部教授、防災・減災・復興学研究所長を兼務

聞き手：日鉄環境株式会社分析ソリューション事業本部

営業部長 箭内朋子（化62）

九州工業大学大学院工学研究院建設社会工学研究系

教授 鬼束幸樹（設建H4）〈文責〉



エンジニアは、技術情報を分かり易く伝える『技術の翻訳者』たれ！

～規矩理事長の略歴～

九州工大大学院修了後、横浜国立大学工学部助手、佐藤工業(株)中央技術研究所主任研究員を経て、2002年関東学院大学工学部助教授に就任、12年～工学部長、13年12月～学長、21年4月～現職

4月1日の学校法人関東学院理事長へのご就任おめでとうございます。法人全体の教学と経営を統括されることになりましたが、仕事内容をお教え下さい。

関東学院は、大学、大学院、さらにそれぞれ二つずつの中学高等学校、小学校、こども園があり、約1万6000人（学生・生徒・園児等1万4600人、教授・教師等1600人、事務職員等400人）規模の組織です。創立時の教育理念を守りながら、それぞれの学校が独自に発展成長するために、政策的、資金的、人的にサポートするのが理事会と理事長の役割です。教職員の雇用を守ること

も重要な仕事です。
―昨年からのコロナ対策で、実験が多い理工学部では対応に苦労されたのではないのでしょうか。

3月まで、学長を務めていましたが、対面授業にこだわりました。情報はネットでも入手できるし、授業もオンラインで実施可能ですが、ディスプレイを一枚挟むと熱量が伝わらないんです。理工系は特に教育が重要で、それは卒業生が将来社会で技術を伝える立場になったときにも反映されるはずです。だから、勉



2021. 4. 24 関東学院大学（箭内、規矩先生）

強の大事さ、面白さを熱量として伝えるために、停止命令が来ない限りは対面授業の続行を決めていました。理工系はものづくりやインフラの維持管理などに関与するため、技術者としてのマインドや倫理観などが学生時代に備わっていることが必要ですね。とりわけ土木系では、地盤沈下のような事故を想定すると、10年、50年、100年先を見据え、倫理観を持って仕事に取り組むことが大事ですね。

工学部長の時に、学部理念に、清廉、実直、公共心を入れた。ところが、人社系の先生たちは、「ふん

みたいな感じでした。

これまで土木の現場では倫理観と誇りを持ってきちんに対応してきました。ただ、「不言実行」が格好いいという風潮もあり、情報発信をしてこなかった。土木はその技術を守りながら自分たちで黙って耐えている(どM体質だよ)。これからは世間にわかりやすく情報発信する必要があるですね。

—土木は建築と違って目立ったものだけでなく、その下の基礎となる目に見えないものづくりが基本ですね(私(筋内)の専門の化学も同じで、原材料を作るなど製品前のものを地道に作るところが似てますね。

土木を選ばなかった人は、社会に対するアピールが強いけど、土木を選んだ人は目立たないことにむしろ快さを感じるというか、そこに自負心をもっていきます。

—人から褒められないけど裏方として社会を支えているという自負心が芽生える試みを関東学院で行ってこられたのですか。

関東学院に赴任(平成14年)した時に、学科の教員を含め、自負心と誇りを伝える教育の欠落に気がつきました。その時、単に教員が学生に

知識を押しつけるのではなく、九州工大のように教員と学生が密に接し、人間性を育成する学科・研究室に変えたいと思った。まさに「技術に堪能なる士君子」の育成です。関東学院大学の校訓に、聖書から引用した「人になれ 奉仕せよ」があり、生涯をかけて人間形成に努め、社会のために貢献せよという教えがある。

関東学院が目指す人間像は九州工大と同じ。ただ、学科全体を九州工大気質に近づけるには紆余曲折があり、10〜15年ぐらいかかった。

—大学、学科、研究室の選択理由、大学院進学の動機を教えてください。

子供の時は将来何になりたいかなど、何も考えてなかった。高校生の時もそう。大学受験1年程前に、多分大成建設だったと思うけど、入社5年程のご近所の方から土木を勧められ、その気になっていた。ところが九州工大の2次試験直前に、予備校の先生から、これからの九州工大は制御工学だと言われ、思わず第1志望欄に制御と書いた。結果はちゃんと(笑)制御は落ちて、第2志望の土木に入れてもらった。

1年生の時、全然授業に行ってなくて、年間の取得単位はたったの8。

線形代数、化学実験、体育と他ちょっとしか取れなかった。しかも化学実験は、(筋内さんの)ノートのお陰で助かったというお粗末ぶり。その後も留年して放校の危機が迫り、首の皮一枚で4年生に進学する際に安田先生との出会いがあった。「めちゃくちゃきついよ、あの研究室は！」

との評判だったけど、最後まで死ぬほど遊んだから、最後まで死ななうと決心し、地盤耐震研究室と書いた希望調査を出した。当時、研究室配属はジャンケンで決まっていたけど、留年生の僕を先輩が気遣い優先してくれた。九州工大はきちんと勉強するのが当然の文化だったことが、それまで長浜ラーメンを食べに行くことと、勉強以外しか力を入れなかった僕を後押ししてくれた。

—本当は水理学に興味があった僕が、苦手な地盤工学(土質力学)の液状化が専門の安田先生の下で研究してみると、先生とは月とすっぽん会話話が成立しないんですよ。この人至少でも技術の話ができるようになってほしいと思ひ、進学を決意しました。余談だけど大学院に進学した後、コンクリートの渡邊明先生や風工学の久保喜延先生から、「お前は絶対卒



平成2年3月 開発土木工学科正面玄関にて

業できないと思っていたよ。よく大学院を選んだね」みたいなことを言ってもらえた。やっぱり見てくれるんだよね、と感激した。

—先生方は、九州工大を他の大学とは全く違う学校にしたかったんじゃないかな。チームワークを大切にすることが、DNAに注入された気がする。あと、大学の授業は教科書の内容を順番に教わり、暗記量が増える単調な内容になりがちだけど、その先にある仕事の意義、社会に対する貢献度を教えてくれた。そんな九

州工大の先生のスピリットを関東学院で広めたいと思っています。

—私（箭内）は化学系なので、使っている薬品が毒劇物の場合、ほんのちよつと流出するだけで何万人も死者を生んでしまいます。先生から、そんなことも知らなかったら何百万人もの人殺しをされると言われました。その言葉はすごく印象に残るから、自分の仕事の大切さを実感して社会に出ていきますね。

—横浜国大から民間に転職された経緯をお教え下さい。

ドクターを出る頃に大学に勤めてみたいと思いました。液化化の研究を継続したいし、九州工大の泥臭い教育システムに自信を持ち始めていたので、それをどこかで継承したいとも思った。でも新天地には土着の伝統があり衝突した。過信というか、うぬぼれがあった。それで、大学教員をあきらめて、ゼネコンに移ったんですよ。ゼネコンでは色々なことを教えてもらった。「規矩さん、そんな事も知らないですか」と初めて言われた時は、がつつんと思っただけど…。配属された技術部は、突発事故の対応部署でした。そこには20〜30年の経験ある部長さんがいて、

自分の経験に裏打ちされて自信を持って対応しており、ほぼ予想通りに問題が解決していました。こうなるには、どれだけの勉強が必要かと

啞然とした。博士号を持っている自分が、現場では何も知らない役立たずだと気づかされた。だから、新入社員になったつもりで心を入れ替えて、死に物狂いで一から勉強した。時には夜中にふつと起きて、調べものをするという生活を何年もした。そうする中で信頼できる上司、良くしてくれる先輩ができ、すごくありがたかった。充実した貴重な8年間でした。

—規矩先生のように他大学と民間という異色の経歴と文化を持つ人材を

関東学院は必要と感じたのですね。

もちろん時代が違えば、僕なんかは学長に選ばれなかった。当時は色々なことが閉塞状態になっていて、特に首都圏の私立大学は学生減で受験の維持も厳しい状況でした。そこで、マインドを変えるために、ちよつと変わったことを考えている奴にやらせようと思っただけかもしれない。

改革を進める上で職員の力にすごく期待しました。教員の一部は教えてあげるという感じだったし、文系の

の教員には、研究の代償として仕方なく授業すると公言する人もいた。でも、職員の人たちは希望して教育

機関に入職し、この職場が永続してほしいと願っている。だから、実は大学という組織をよく考えているし、学生や教員を長年現場で見ているから、教育に対する思いも強く、制度の改善案なども極めて適切なんです。この人たちと一緒に遊び、よく仕事をしました。

—関東学院で改革を進める上で、どのような点に留意され、ご苦労されましたか。

以前、2年間だけ横浜国大にいたんです。やっぱり九州工大と雰囲気

が全然違ってました。横浜国大も優秀で、研究室もすごく活発なんだけれど、教員と学生との間には溝があった。学生はなかなか指導教授に

会えないなんて状況もあった。その雰囲気を変えようとしたら、頭を

ごつんと叩かれて、辞めなさいとなった。

関東学院では同じ轍を踏まないと思った。企業と違い役職の上位者が決めたことには従うという風土ではありません。みんなと一緒にやろうという姿勢が根本だと思うんです。

命令しても大学教員は動きません。だから、賛同者を増やすというよりは、結果として良かったと感じる学生や卒業生が増えてくれば、自然とそのやり方がベターだとみんなが思ってくれて協力してくれる。

—大学は一般企業と違い、一匹狼の先生たちを取りまとめることは、学長として大変だったのではないかと

思うのですが。

なかなか本音で言いづらいんです

けれど、教育が得意な先生、研究が得意な先生、大学行政が得意で好きな先生もいます。文科省が昔、研究

大学と教育大学に分類するといつてたけど、それは教育に携わる教員に失礼というか、アイデンティティ

に関わる問題だと思います。研究ができる人は教育もでき、教育ができる人は研究に対する意欲があるんです。どちらか片方だけと言っている人は、

どちらも駄目。研究しているから教育はなかなか無理と言っている人に限ってそれほど研究していないし、

うちの学生には私の研究は理解できないと言う人に限って大した研究はしていません。それを学長が発言し過ぎると反感を買うわけですが、今、それをする事の大切さ、楽しさを



平成元年2月 一番左：安田先生、中央：規矩先生

伝え、雰囲気として組織全体のモチベーションを少しずつ上げるように努力しました。

―九州工大よりも関東学院に長くいるからやっぱり愛着もあるし、期待されている人たちに応えたいという気持ちもありますよね。

あるよね。研究室の学生がゼネコンやコンサルに就職するんだけど、「関東学院から来た学生は鍛えられてるよね」って言って欲しいわけ。優秀と言われると色々な意味があるけど、それよりも、鍛えられてるねと言われる方がすごく気持ちが良い。

教員冥利に尽きる一瞬です。

やっぱり、僕のお手本は安田先生。大学院生だった時、先生が研究室で学生とどんなにお酒を飲んだ後でも、自分の部屋に戻って仕事するのを見ていた。昔は、学生を技術者の後輩と思って面倒を見てくれて、遊んでくれて、それでいて、研究者として、実務家として、学生にとって手の届かない存在、そんな師匠がたくさんいた。学生に背中を見せるって、言葉よりも説得力がある。誰に出会うかで人生がガラッと変わる。僕は安田先生と出会って生まれ変わった。ただ、それに気がつかずにいる人と、気がつく人がいる。だから大学の入学式では、気がつく人になって欲しいと必ず新入生に伝えている。

―ご専門の液化化に関する研究活動と課題をお教え下さい。

地盤工学の基礎理論はかなり確立されているけど、個々の地盤の調査技術はこれからも進展すると思う。「安く正確に」は当然だけど、非破壊や非接触など、まだまだ世界中で需要は尽きない。

地盤工学や土木だけじゃなく、やっぱり防災、災害対策が必要と思う。自治体や世の中の人は、防災は

コストだと思ってる人が多いけど、実はバリューなんです。国や街の価値を高め、生活の質の向上につながるんです。これを土木屋が発信していかないと駄目だと思ってるんです。知識がそんなに豊富でない一般の方に、エンジニアは分かりやすく情報を伝える「技術の翻訳者」になる義務があると思ってる。技術を知っている人と、恩恵を受ける人との間の言葉の壁を繋ぐのが本当の仕事という気がする。

―専門家としてイスタンブール工科大学に派遣されたときの思い出は。

JICAでイスタンブールに地盤解析と土質試験の技術移転で2週間の滞在予定でした。ところが出発の1週間前にコジャエリ地震が起こって任務内容が変わり、日本から渡航する現地調査団の受入れ役をやれと言われた。こちらも行ったことがないのに…。

海外は土木のステータスがめちゃくちゃ高いことを改めて感じた。ただ、トルコもやっぱり欧米人にかなり搾取されていると感じました。人財流出も激しく、例えば最高レベルのイスタンブール工科大学を卒業したら、大体は欧米の大学院に進学し、

そのまま企業に入って、国には業務として帰ってくる。トルコの役目は材料と労働者の提供のみ。そんな嫌な風景を見せられたこともあって、日本の土木の仕事と教育のやり方を、これから発展しようとして踏ん張っている国に授けたいと思った。

実は今、ベトナム国家大に日本風、九州工大風の土木工学科を作る協力をしてる。そして、米国に留学するのも、役人になるのもいいけれど、ベトナムに残って、中核技術を伝授する技術者を目指すシステムを作っている。こじつけのように聞こえるかもしれないけど、やっぱり私利私欲よりも、誰かのためとか、学校のためとか、自分の国のためといった、九州工大スタイルを導入している。

―他分野と情報交換を行う技術開発を行う機会がありますか。

企業の人はもう多分にやっていると思う。土木材料も地盤改良材料も今、完全に化学の世界だね。初めて実感したのは大学院生の時。必死に流動予測の解析法を模索してた時、他分野の人に聞いたら、そんなの粉体工学の世界では確立済みの計算方法がありますよって言われた。他分野の技術者と情報交換することで研究

がブレークスルーすると実感した。
 —そういう融合はあるんですよね。

JR九州工大前の狭いキャンパスにいろんな分野の学科が集中しているのは、先生同士にとってもすごく良い環境だと思います。この状況を活用すれば技術開発が急速に進むと思う。あ、キャンパスが狭いと言うと怒られるかな。

—本当にそう思います。世の中に役に立つことが技術者冥利に尽きることで、独り占めするのは良くないと思いますね。

基礎研究と応用研究は少し違うところがあって、うまく発信し、応用し、実現して行くプロセス作りが大事です。すると、活動の場が広がりますね。

自慢話じゃないけれど、3年前に文科省からお金をいただいて、関東学院に防災・減災・復興学研究所を作ったんですよ。所属教員は土木が3分の1ぐらいで、それ以外に経済、法律、電気や情報もいる。それから、看護、栄養などの教員にも参加してもらった。何でこんなに学際かと言うと、結局、地震で災害が生じた後の復旧・復興には技術だけでは対応不可能で、社会的・経済的な検討も

必要だし、人の心の問題も解決しないといけないから、実践神学とか図書館学みたいな先生もいるわけ。

オールジャパンで復旧・復興に向けて対応するんだけど、土木は非常にオープンマインドだから、いろんな分野の人たちをくつつけるハブというかバインダーの役目をして、新しい防災体制の構築ができると思った。

いざスタートすると割と評判は良く、文系など色々な分野の方が集まってきたり、相乗効果が発生した。例えば、災害時の看護のトリアージの考え方は土木や建築構造物の復旧時の選別に適用可能だったり、これは新たな

試みと思った。今後は関東学院の枠を飛び出して、大学同士や地域間で連携するのもいいと思う。自分たちの分野だけで共有している感覚で話をして駄目だと思う。

—女性の社会進出については、どうお考えですか。

土木の分野はその恩恵を老若男女、いろんな人たちが受けるから、そもそも男性とか女性とかいう線引きがない。女性技術者ももっと増えれば良いけど、ジェンダーバランスを決めるべきではないかと思っている。むしろ、ジェンダーバランスを議論す

ること自体が女性技術者に対して失礼と思う。優秀な女性が適切なポジションにつけば、自然とある比率に収斂していく。女性比率の目標値を設定するよりも、女性が働きにくい職場とか、活躍しづらい分野の環境を改善することが必要で、それは男性でも同じだと思う。

—本当にそう思います。化学業界は元々女性技術者の割合が多いですが、昔は補助業務ばかりでした。私が入社したのは男女雇用機会均等法の2年目で、本来なら機会が均等に与えられるべきなのに、「女子、可○』という部署しか配属は駄目とか。逆に、脚半にヘルメットで現場に行く」と、「え？女の人来たの」ということも多かったです。

『ドボジョー！』という言葉が一時期ありましたけど、土木では特に現場はきついと思うんですよ。テレビで、現場監督の女性が協力会社のおじ様方の前で朝礼すると、声が小さいと怒られてました。そういう時代を乗り越えて、今、女性の進出があると思うんですよ。

『ドボジョー！』は実は関東学院が発祥の地。昭和62年に全国で初めて関東学院に土木工学科の女子クラス

を作った。同年その女子学生が「全国土木系女子学生の会」を作った。それが『ドボジョー！』の原点。
 —土木は3Kと忌み嫌われていたが、若手会員へ向けてアドバイスをお願いします。

今は忌み嫌われていないと思いませんけど、一つだけ自責の念も込めて申します。かつて関東学院の土木の受験者数がすごく減った時に、学科名を「社会環境システム学科」に変えた。何をやっている学科か判らなくなりました。当時、土木学会でさえ土木の名前を捨てようという議論があり、日本中の大学から土木の学科名が消えていった。シヨックだったのは、紀伊國屋書店で土木の書棚がなくなりました。これはボディブローのように効いて、土木工事は知っていても、土木という学術分野の存在を知らない若いお父さんやお母さん方が増えてしまった。少年野球が

いっばいあるからプロ野球が存続できてるんであって、やっぱり土木という言葉を消すのは絶対にだめだと思った。10年ぐらい前に再度、学科名を変えるチャンスがあったので、土木に戻した。みんな本心では土木に誇りを持っているのに、目先の受

入った。少年野球が存続できてるんであって、やっぱり土木という言葉を消すのは絶対にだめだと思った。10年ぐらい前に再度、学科名を変えるチャンスがあったので、土木に戻した。みんな本心では土木に誇りを持っているのに、目先の受



2021. 4. 24 関東学院大学

験倍率だけを考えて名前をいじった。どんなに語呂が悪くても、どんなに心象が悪くても、土木の名を守る気がないと、この技術もそのうち廃れてしまうと思ってるね。

— 本来にそう思いますね。化学も一時期、物質という名称もありました。化学と金属で良いと思います。だから土木という名称は、今は忌み嫌われていないと思ってます。

その通り、ないと思う。最近、僕の造語の「土木は『幸せの最大公約数』が褒められた。建築ではクライアントが満足する構造物を作るのがベストで、それに向かって努力する。それも一つのやり方。でも、土木は公共構造物なので、全員が満足することはない。だから大多数の人が幸せになれるような、最大公約数を探るのが土木の仕事だと思ってる。技術者としての信念を持ってベストを

尽くせる。学生募集やいろんなところで土木の話をする時に使っている。100年に一度の大変革期と言われてますが、コロナの影響でどう変わるか、建設系の分野はどうですか。

時代が10年進むと教育のやり方も10年進むと言われるけど、本質的には決して変わるものじゃない。建設分野もそう。ただ、今回のコロナで気づかされたのは、世の中の変化は予測できないこと。大地震、大災害が起きていく。私たちは、今の状況でのんびりとあぐらをかいていては駄目だと改めて気づかされた。— 確かにそうですね。常に危機意識を持ってと言われますが、正に今回のコロナは世の中を激変させました。雇用が脅かされる状況も発生していますが、関東学院にも学費が払えなくて退学の危機が迫っている学生さんがいるんですか。

一定数はいる。それで、とにかく、学びの環境を継続することだけに注力したんですよ。奨学金制度など7つの支援策を設けたんだけど、中でも「長期履修制度」に期待した。これは、最大2年間の学費の支払猶予を設け、6年間までは4年分の学費で卒業できる制度です。その間は授

業料を払わなくても、授業に出て授業を継続して下さい。授業料を稼ぐために休学する学生は、なかなか大学に復帰できずに結局退学してしまう。それを防ごうと思ったんです。— たくさん、お話を伺っていて途中で九州工大へのあふれんばかりの愛情を感じました。

やっぱり、どこかでぐっと気持ちが高まるんだよね。ただ、入学当初から母校愛があつたかと言われると困るけど、どこかのタイミングで誇りになり、母校愛が変わっていくんだと思う。他大学に比べたら明らか九州工大OBの母校愛は凄いですよ。それに、この卒業生のつながりの強さは他大学には全く見られない。— 確かにそれはありますね。弊社の社長が九州工大の開発土木工学科の出身で、めつたにない社長との打ち合わせの時、最初は仕事の話をしたけど、最後は上司と部下の関係とは別に九州工大の先輩後輩としても今からつき合っていると言ってもらえて、垣根が下がりました。

技術の分野には絶対に九州工大の出身者はいるので、そういうのは大きい。絶対数が多い他大学に負けな存在感を発揮できるのは、もしか

したら九州工大は、最初に大学で学んだ技術の仕事をずっと続けてる人が多いからかもしれない。

— 九州工大がより良くなるためのお言葉をいただければ幸いです。

教育関係の出版物やWebサイトを見ても、必ず九州工大は教育、技術、社会貢献といった分野でトップクラスの評価をいただいています。でも九州工大は奥ゆかしい。卒業生の僕らから見たら、それがまた九州工大らしくて心地よいのですが、これからの情報社会ではもう少し積極的にPRをした方が良いかもしれない。要するに、九州工大で学ぶことで、こんなに社会に貢献できるよ、九州工大を卒業することによって、誇りをもって技術の世界で生きてゆけるよ、人生が楽しくなるよ、といった若者へのメッセージは結構大事だと思います。

協力：東京支部 鉦山・建設系分会

幹事長 真柴 浩（建設H4）

幹事 岡田光志（開62）